

## 伊勢崎市指定史跡

# 丸塚山古墳

指定年月日：昭和 52 年 9 月 9 日 所在地：伊勢崎市三和町

## お問い合わせ

伊勢崎市教育委員会 文化財保護課

〒372-0036 伊勢崎市茂呂南町 5097-2

電話 0270-75-6672 Fax 0270-75-6673

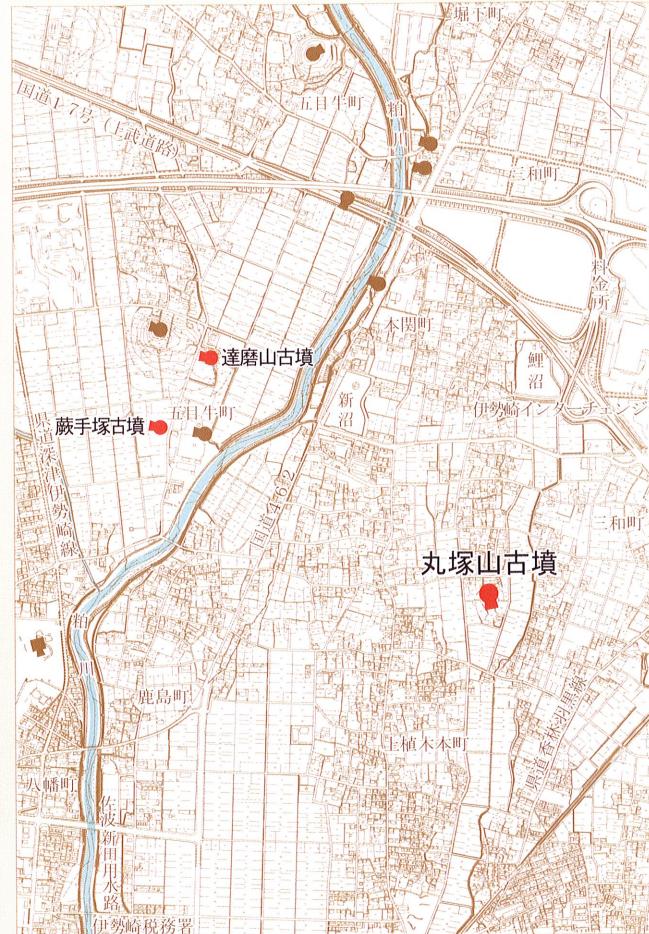
E-mail:bunkazai@city.isesaki.lg.jp

うえはす

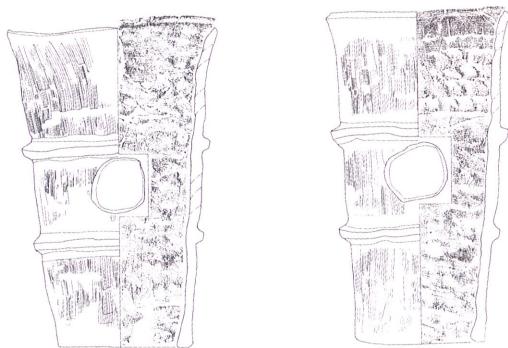
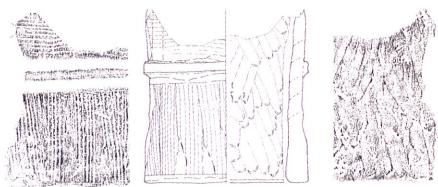
殖蓮地区は市内でも多くの古墳が造られた地域です。群馬県が平成 29 年に刊行した『群馬県古墳総覧』によれば 458 基の古墳が数えられます。伊勢崎市内の古墳の総数は、1,504 基なので殖蓮地区は約 3 割を占めます。これは昭和 10 年に行われた県内古墳調査で確認できた古墳とその後の発掘調査等で調査した古墳の総数なので、将来、未知の古墳が発見される可能性もあります。

丸塚山古墳は古墳時代中期（5 世紀後半）に築かれた有力者のお墓です。古墳は丸い後円部と台形の前方部の組み合わせで造られていますが、後円部に比べ前方部が短いため、一般的な前方後円墳と区別し、帆立貝形古墳と呼ばれます。周辺には水田が広がりますが、古墳は周辺よりもわずかに高い場所に立地しています。

昭和 30 年に群馬大学が発掘調査を行い、全長 81m、後円部径 52m、高さ 8m、前方部長さ 27m と判明しました。前方部は後円部側の方が広く、先端に行くにつれて幅が狭くなる形をしています。調査では、円筒埴輪や朝顔形埴輪が出土しており、それらの特徴から 5 世紀後半の築造と考えられます。丸塚山古墳周辺では粕川の対岸に達磨山古墳や蕨手塚古墳といった古墳時代中期に造られた円墳があり、市内でも中期の古墳が多くみられます。

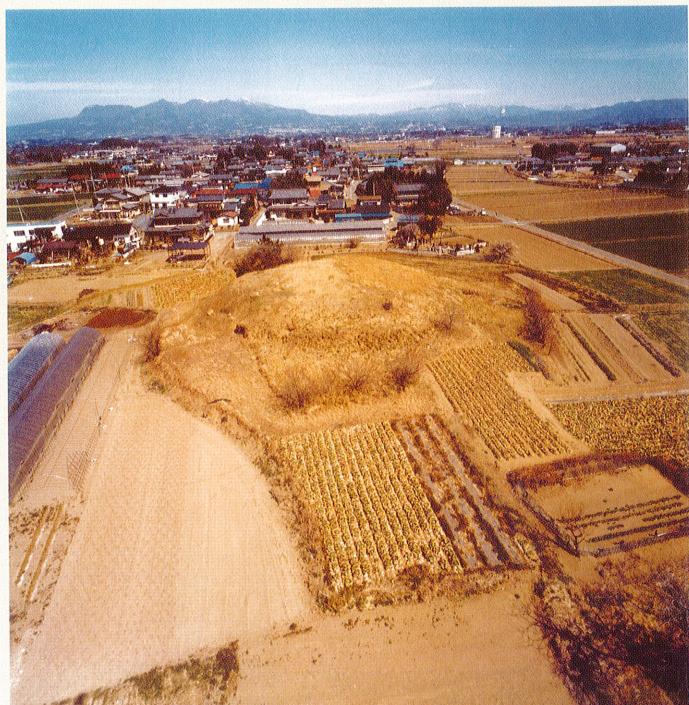


丸塚山古墳周辺位置図



『埴輪研究会誌』第 12 号 (2008) から転載

丸塚山古墳から出土した埴輪



丸塚山古墳から赤城山を眺む

後円部の頂上には3基の埋葬施設が造られていました。全て組合せ式の石棺と考えられます。残念ながら、後世の開発の影響で造られた当時のままではなく、石棺内から副葬品も全く出土しませんでした。各石棺の計測値は表の通りです。1号と2号石棺は、凝灰岩を組み合せて構築しています。棺の底には石の平らな面を上にして敷き詰め、粘土を貼り仕上げています。また、1号石棺には蓋石も残存しており、他の部材と同じく凝灰岩製でした。一方、3号石棺は他の石棺よりも50cm深く掘り込んで造られていました。棺を構成する石も伊勢崎市周辺では産出しない緑泥片岩を使用しており、遠方から石材を運び込んだと考えられます。後の時代の破壊を受けており、石材の一部が残っているだけでしたが、石を配置した痕跡から3基の中で最も大きいものと判明しました。昭和13年に刊行された『上毛古墳綜覧』では、丸塚山古墳の記述で「緑泥片岩製の長持形石棺アリ」と記載されています。長持形石棺はお富士山古墳の埋葬施設に採用されています。この石棺は、「王者の棺」と呼ばれるもので、当時の中心地であった近畿地方にあるヤマト王権の大王墓に採用される石棺です。丸塚山古墳のものは残念ながら、現存しませんが、お富士山古墳に後続する有力者の墓の可能性は高いと思われます。

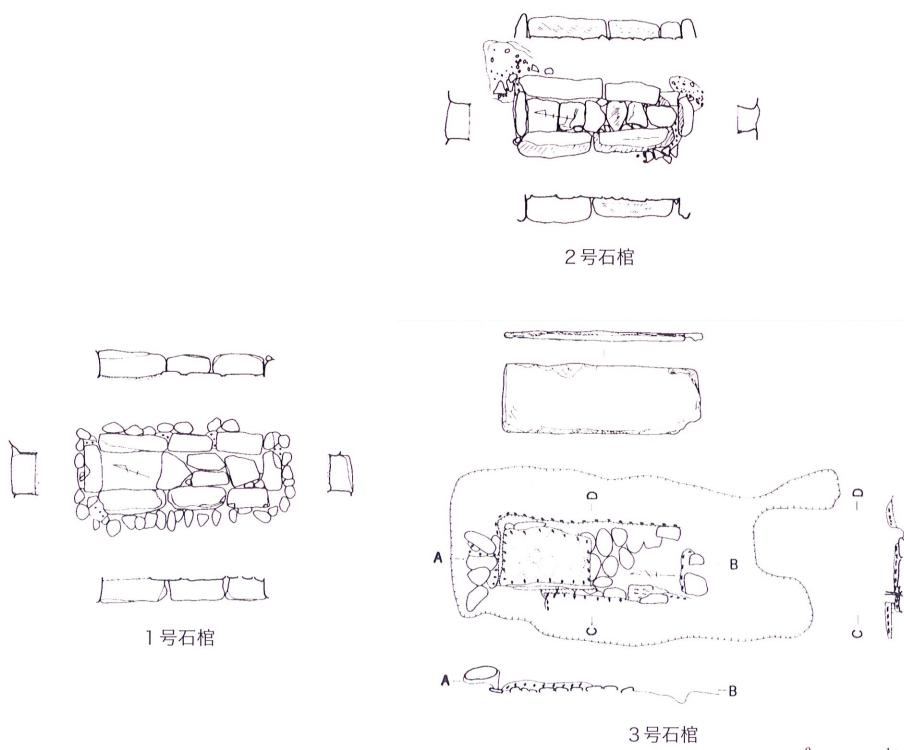
1号 石棺	長さ	東壁	1.84
		西壁	1.83
幅	北壁	0.45	
	南壁	0.45	
高さ	北壁	0.23	
	南壁	0.23	
主軸方向		N - 18° - W	
2号 石棺	長さ	東壁	1.75
		西壁	1.75
幅	北壁	0.36	
	南壁	0.28	
高さ	北壁	0.26	
	南壁	0.22	
主軸方向		N - 9° - W	
3号 石棺	長さ	東壁	[2.10]
		西壁	[2.10]
幅	北壁	[0.66]	
	南壁	[0.60]	
高さ	北壁	[0.60]	
	主軸方向		N - 1° - W

単位はすべてcm [ ]は推定値



『群馬県史』資料編3(1981)に一部加筆

丸塚山古墳測量図



『群馬県史』資料編3(1981)から転載

石棺実測図